

小学生の学校生活スキルに関する研究

学校生活スキル尺度（小学生版）の開発

跡見学園女子大学 山口 豊一

東京成徳大学 飯田 順子

筑波大学大学院人間総合科学研究科 石隈 利紀

本研究の目的は、小学生が学校生活を送る上で出会う発達課題・教育課題の解決を促進するスキル（以下、学校生活スキル）の個人差を測定する尺度を開発することである。研究1では、飯田・石隈（2002）で作成された学校生活スキル（中学生版）の項目、小学生5年生・6年生を対象とした自由記述調査、小学校教師を対象とした自由記述調査から項目を収集・作成し、内容的妥当性を検討した結果、59の学校生活スキルが得られた。研究2では、研究1で得られたスキル項目を基に、小学校5年生・6年生505名を対象に調査を実施し、因子分析を行った。その結果、自己学習スキル、課題遂行スキル、進路決定スキル、集団活動スキル、コミュニケーションスキル、健康維持スキル、健康相談スキルの7つの下位尺度、計43項目からなる学校生活スキル尺度（小学生版）が作成された。この尺度の心理統計的特徴を検討した結果、2つの下位尺度を除いて高い信頼性・妥当性が確認された。

キーワード：学校生活スキル，小学生，尺度作成

問題と目的

不登校や少年犯罪の増加・低年齢化など児童生徒にまつわる問題傾向の増加が指摘されている。その背景に、児童生徒のもつ社会的スキルやライフスキルなど日常生活の中で求められるスキルの低下が原因の1つとして挙げられている。Merrell & Gimpel（1997）は社会的スキルと外在化された問題傾向（反社会的行動、非行、攻撃性、多動傾向）や内在化された問題傾向（うつ、不安、社会的引っ込み思案）との関連を指摘している。日本においても、社会的スキルと学校ストレスの関連（戸ヶ崎・岡安・坂野，1997）や社会的スキルと学校適応（戸ヶ崎・嶋田・坂野・上里，1995）の関連が検討され、社会的スキルの欠如は高い学校ストレスや学校における不適応感に結びつく傾向が明らかにされている。このようにスキルの欠如は、現在の適応状態や今後の問題傾向と結びつくことが指摘されており、特定のスキルの欠如が顕著な子どもに対してそのスキルを教育していく必要がある。

学校でスキルを教育していくためには、児童生徒がどの段階でどの程度のスキルを持っていることが望ましいのかという基準が必要になる。各段階の児童生徒のスキルのレベルを測定する尺度が必要である。

このような問題意識から、飯田・石隈（2002）は、中学生が一人の個人として成長していく中で出会う発達課題と学校生活を送る上で出会うことが予測される教育課題に対処する際に役立つスキル（以下、学校生活スキル）を測定する尺度を開発している。まず、飯田・石隈（2002）は、学校心理学の援助領域の枠組み（石隈，1999）と社会的スキル（庄司，1991）やライフスキル（Darden, Ginter & Gazda, 1996; WHO, 1994）における研究でスキルの基本的性質とされている認識を参考に、学校生活スキルを、「学習される、学習面、社会面、進路面、健康面の領域で、中学生が抱える発達課題・教育課題の解決を促進する、学校適応において個人の目標達成に有効である、学校という場面で受容される、学校で教育できる行動」として定義している。そして、その定義に従い学校生

活スキルの個人差を測定するための尺度「学校生活スキル尺度(中学生版)」を作成している。この尺度は、個人で行う学習のために用いられるスキルである「自己学習スキル(14項目)」、進路決定に必要な意志決定スキルや問題解決スキルに関するスキルである「進路決定スキル(12項目)」、集団活動の際必要とされるスキルである「集団活動スキル(12項目)」、健康維持に関わる自己統制に関するスキルと大人への相談に関するスキルからなる「健康維持スキル(9項目)」、同年代の友人や異性とのコミュニケーションに関するスキルである「同輩とのコミュニケーションスキル(7項目)」という5つの下位尺度、計54項目から構成されている。

一方、児童生徒が各学校段階で出会う発達課題・教育課題は異なっていることが知られており、各学校段階に応じた測定尺度の開発が必要となる。例えば、ハヴィガーストの発達課題において、小学校段階と対応する中期児童期と中学校段階を含む青年期は分けられており、中期児童期の課題には、「家庭から出て仲間集団に加わるという前進、身体面での神経筋の技能を必要とする遊びや作業の世界への前進、精神面での大人の考え方や論理・象徴・コミュニケーションの世界への前進」を大きな特徴として挙げている(ハヴィガースト, 1997)。発達課題と同時に、小学生には小学校という生活の場で出会う独自の教育課題への取り組みも求められている(石隈, 1999)。各発達段階・教育段階で児童生徒が求められる学校生活スキルは異なっており、各発達段階・教育段階に対応した学校生活スキルの測定尺度を開発する必要がある。発達課題・教育課題の取り組みに求められるスキルを包括的に測定できる尺度「学校生活スキル尺度」は中学生版しか開発されておらず、小学生版・高校生版の開発が必要である。

以上のことをふまえ、本研究の目的を、以下の2つとする。第1の目的は、小学生が学校生活を送る上で出会う発達課題・教育課題に取り組んでいく上で求められる学校生活スキルの内容を調査することとする。第2の目的は、小学生の学校生活スキルの個人差を測定するための尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することとする。なお、小学生は6歳から12歳と幅広い年齢を含んでおり小学校1年生と6年生では発達水準も大きく異なる。本研究では、小学校生活を送る

ために必要なスキルをある程度獲得し、スキルの獲得レベルを測定したときにある程度個人差がでてくると思われる小学校5年生・6年生を対象とする。この尺度を、小学生を対象とした唯一の尺度という点で、学校生活スキル尺度(小学生版)とする。

研究 : 小学生の学校生活スキルの内容の調査

1. 目的

小学生が学校生活を送る上で出会う発達課題・教育課題の取り組みを促進する学校生活スキルの内容を調査する。

2. 方法

以下の(1)~(3)より小学生の学校生活スキルを調査し、(4)により小学生の学校生活スキルとして適切かどうかを検討した。

(1) スキルに関する先行研究 前述の飯田・石隈(2002)の項目を、発達のみにて小学生の学校生活スキルの個人差を測定するのに適切であるか、専門家チームで検討した。専門家チームには、学校心理学の専門家である著者ら3名(いずれも学校心理士の資格を有し、学校心理学を専門とする大学教員)および小学校教諭2名・養護教諭1名(茨城県内の別々の小学校に所属する勤務年数15年を超える教員で、今までに校内の教育相談・生徒指導などを担当した経験をもつ)が含まれた。

(2) 児童を対象とした自由記述調査 調査では茨城県内の2つの小学校に通う小学校5年生48名・6年生84名を対象として、「勉強のこと」「学級や友だちのこと」「進路のこと」「健康のこと」について、「こんなことができたなら、学校生活が楽しくなるだろうな、こんなことができたなら、学校生活がうまくいくだろうな、と思うことを自由に書いてください」という教示の下、回答を求めた。なお、小学校Aは茨城県内の都市部にある中規模校である。小学校Bは茨城県内の農村部にある小規模校である。いずれも生徒指導上の問題は少ない様子である。

(3) 教師を対象とした自由記述調査 前述の2つの小学校で勤務する小学校教師37名を対象として、「子どもたちが、学校生活を送るにあたって、こんなスキルを身に付けていたらいいなと思うことがありました

ら、自由にお書き下さい」「日ごろ子どもたちと接していて、こんなスキルが特に弱いと感じていることがありますら、自由にお書き下さい」という問いに対して、自由に回答を求めた。なお、学校全体で調査を行ったため、対象とした教師の教職年数や担当してきた学年、校務分掌については幅広く含まれている。

(4) 専門家グループによる項目内容の検討 (1) ~ (3) で収集された小学生の学校生活スキルについて、小学生の発達を促進するスキルとして内容的に適切であることを第1の選択基準として、スキルが具体的な行動レベルで記述されていることを第2の選択基準とし、前述の専門家グループで検討した。

3. 結果と考察

以上の(1)から(4)の過程を経て、小学生の学校生活スキルとして、59の項目が得られた。まず第1の過程で、学校生活スキル尺度(中学生版)から、前述の専門家グループによって小学生の学校生活スキルとして重要なスキルを採用したことで、幅広い学校生活スキルを採用することができたと考えられる。学校生活スキル尺度(中学生版)は、欧米で開発された青年期(13歳~18歳)のスキルを測定するライフスキル尺度・日本の中学生108名を対象とした自由記述調査・日本の中学校教師17名を対象とした面接調査から作成した項目を、809名の中学生を対象に実施し信頼性・妥当性を検討した尺度であり、学習面、社会面、進路面、健康面という学校生活の側面を網羅的に測定するための項目が揃っており内容的妥当性が高い尺度である。その尺度から、小学生に適したものを採用したことにより、学校生活の各側面を測定する項目が得られたと考えられる。

次に第2・第3の過程で、小学生・小学校教師を対象とした調査を行ったことで、小学生独自と思われる項目も得られた。例えば、小学生では困ったとき自分で解決することと同時に、大人に相談したり援助を要請することが重要なスキルとなる。そこで、「こまったとき、だれかに手助けを頼むことができる」を加えた。また、健康面のスキルとして基本的な生活習慣の1つのスキルとして、「食事の後に、はみがきがきちんできるとできる」「すすんで自分にあった運動をすることができる」を加えた。

最後に第4の過程としてスキル項目の収集後、専門

家グループによって各項目の発達の適切なさおよびスキル項目としての適切さを検討したことにより、最終的に収集・選定された学校生活スキルの項目は、小学生(5年生・6年生)の学校生活スキルを測定する項目として適切であると考えられる。

研究 : 学校生活スキル尺度(小学生版)の開発

1. 目的

小学校高学年児童の学校生活スキルのレベルを測定する尺度、学校生活スキル尺度(小学生版)を作成し、その信頼性・妥当性を検討する。

2. 方法

(1) 調査対象 茨城県内の4つの小学校に通う小学5年生244名・6年生261名、計505名(男子282名、女子223名)を対象とした。このうち2校は、研究Iで対象とした小学校であり、あとの2校は茨城県内の都市部にある中規模校と茨城県内の都市部にある大規模校である。大規模校の学校は、生徒指導上の問題も他の学校と比べて多い様子である。

(2) 調査時期 平成15年2月~5月に実施した。

(3) 手続き 担任教諭に教示文を渡し、質問紙をクラスごとに実施するよう依頼し、後日回収した。

(4) 調査内容 以下の測定尺度を用いて調査用紙を作成した。は で作成された学校生活スキル尺度(小学生版)の各下位尺度の妥当性の検討のために実施した。再テスト信頼性の検討のため、A小学校の5学年2クラスに属する78名(男子37名、女子41名)を対象に、のみ2週間の間隔を空けて再度実施した。

学校生活スキル尺度(小学生版) 研究Iで得られた学習面、社会面、進路面、健康面の4領域の学校生活スキルを測定する59項目からなる。「今のあなたの状況に関してどの程度あてはまると思われますか」の問いに対し、「1. とてもよくあてはまる」「2. ややあてはまる」「3. ややあてはまらない」「4. まったくあてはまらない」の4件法で回答を求めた。

学校適応尺度 水野・石隈・田村(2002)によって作成された、5つの学校適応の領域(学習面、心理面、社会面、進路面、健康面)を測定する計50項目からなる尺度「学校適応尺度」を用いた。質問の量を考慮し、水野他(2002)によって尺度作成のために実施された

予備調査において各因子に負荷の高かった上位5項目を採用し、計25項目を用いた。また、水野他(2002)の調査は中学生を対象に行われているため、前述の専門家グループで、文章表現が小学生に理解可能か、

項目の内容が小学生の学校適応を測定する項目として適切かを検討した。の点について、難しい漢字はひらがなにするまたはふりがなをつけることとした。

について項目の内容が小学生に適さない場合は、項目の一部を修正するか、新たに項目を作成した。そのような作業を行った項目は、学習面の適応では、「私は授業に集中することができる」を『私は多くの場合、授業に集中している』に修正、心理面の適応では、「私は最近感情の変化が激しい」を『私は最近気持ちの変化が大きい』に修正、進路面の適応では、「私は自分の生き方に自信がもてる」を『私は自分が好きである』、「私は人よりすぐれた何かがある」を『私には得意なことがある』、「私の未来には明るい希望がある」を『私にはしょう来なりたいものがある』、「私は生き方は自分で決めることができる」を『私は勉強や遊びについて自分で決めている』に修正、健康面の適応では、「私は最近、頭がくらくらする」と「私は最近、頭が重い」を削除し、『私は最近よくお腹が痛くなる』、『私は最近食欲がない』を追加した。「あなたの学校生活の状態について質問します。次の項目をよく読んで、それぞれについて、以下の5段階のうち、あなたに最もあてはまる数字にをつけて教えてください」という問いに対し、「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらとも言えない」「4. かなりあてはまる」「5. 非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。単純加算(逆転項目は得点を変換した後)で学校適応の各側面の合計点を算出した(表1参照)。各領域の得点が高いほど、その領域の適応状態が良いことになる。

学習関連のスキル、進路関連のスキル、対人関係関

表1 学校適応尺度の平均点と信頼性

学校適応	平均点	標準偏差	信頼性()
学習面	15.05	2.84	.64
心理面	13.32	4.09	.79
社会面	15.78	2.93	.57
進路面	15.57	3.14	.65
健康面	16.25	3.79	.80

連のスキル、健康関連のスキルは、いずれもその領域の課題への取り組みに必要なスキルを習得し実行できているかどうかを問う項目であるため、各領域でのスキルが高い児童は、対応する領域の学校適応が良いことが予想される。具体的には、学習関連のスキルは学習面の適応、進路関連のスキルは進路面の適応、対人関係関連のスキルは社会面の適応、健康関連のスキルは健康面の適応と正の相関関係にあることが予想される。

3. 結果と考察

(1) 学校生活スキル尺度(小学生版)の因子分析
学校生活スキル尺度(小学生版)59項目に対して、主成分解・バリマックス回転による因子分析を実施した。その結果、固有値(基準を1以上とした)の落差や解釈可能性から、7因子解を妥当と判断した。その時点で、以下の2つの基準に当てはまる項目は除外した：
(1) 因子負荷量が.40以下である、(2) 2つの因子に同程度に負荷する。16項目が除外され、再度バリマックス回転による因子分析を行った結果、累積寄与率が49.23%となった。因子分析の結果を表2に示す。FからFは抽出された因子を表し、項目欄のゴシックは各因子の共通性の要約文および括弧内に因子の命名とクローンバックの係数値を示している。なお、全体で因子分析を実施した後、学年別にも因子分析を実施した。結果は、5年生・6年生ともに全体と同様の7因子に分類されたため、以後5年生・6年生を合わせて分析を行った。

第I因子に含まれた12項目は、「仕事に関するためになる情報を見つける方法がわかる」「興味のある職業について、情報を集めることができる」など進路についての情報を集めるスキルや、「出てきたいくつかのことをくわしくくわべたり、考えたりすることができる」「問題を解決するとき、いろいろな方法を考えることができる」など意思決定や問題解決に必要なスキルに関連した項目であった。このことから第I因子を『進路決定スキル』と命名した($r = .85$)¹。第

¹ 健康53「心とからだをリラックスさせる方法がいくつか分かる」という項目は、本来健康維持スキルに含まれるべき項目であり、今回進路決定スキルに含まれたことは因子分析による項目の分類の限界であり今後の課題である。ただし、この項目が進路決定スキルに含まれた理由として、児童にとってこの項目が将来のためのスキルで、現時点では意識が低いスキルとしてここに含まれた可能性が考えられる。

表2 学校生活スキル尺度(小学生版)の各因子の項目と因子負荷量(主成分解・バリマックス回転)

項目	M	SD	F	F	F	F	F	F	F	F	共通性
将来について考えるスキル(進路決定スキル: =.85)											
進路22 仕事に関するためになる情報を見つける方法が分かる	2.69	.92	.68	.11	.04	.10	.03	.07	.15	.51	
進路20 興味のある職業について、情報を集めることができる	2.83	.96	.66	.00	.20	-.01	.12	.11	.04	.50	
進路21 自分がしたい仕事をさがすとき、身近で働く人のようすを観察することができる	2.60	.91	.64	.09	.14	-.03	.00	.08	.11	.46	
進路23 希望する仕事につくためには、どうしたらよいか調べるができる	2.85	.89	.63	.05	.25	-.05	.00	.00	.09	.47	
進路26 しょう来役に立ちそうな自分の能力が何であるか考えることができる	2.92	.91	.61	.04	.01	.01	.18	.10	.04	.42	
進路25 出てきたいつかのことをくわしくくらべたり、考えたりすることができる	2.71	.83	.57	.28	.08	.19	-.06	-.05	.09	.47	
進路29 自分の現在の行動や決定が、自分のしょう来にいきょうがあることが分かる	2.99	.89	.55	.04	.15	.09	.09	.20	-.11	.39	
進路19 何が自分にとって大事なのか順位をつけることができる	2.88	.85	.51	.11	.19	.20	.11	.16	.03	.39	
進路27 教わったことが日常生活とどのようにむすびついているかを考えることができる	2.85	.83	.48	.11	.21	.22	.24	.04	.07	.40	
進路17 親や先生の意見だけでなく、自分が何をしたいのか考えることができる	3.38	.77	.47	.16	.11	.11	.16	.34	-.08	.42	
進路18 問題を解決するとき、いろいろな方法を考えることができる	2.92	.75	.45	.25	.25	.10	.14	.21	-.09	.40	
健康53 心とからだをリラックスさせる方法がいくつか分かる	2.89	.94	.41	.03	.09	-.06	.20	.29	.24	.36	
集団場面で自分をおさえるスキル(集団活動スキル: =.79)											
社会32 ぼう力をふるったり人をきずつけることを言う前に、一度止まって考えることができる	2.88	.87	.11	.67	.15	.07	.14	.06	.08	.51	
学習11 授業中むだ話をしないで、先生の言うことに集中できる	2.68	.82	.15	.64	.04	.18	.02	-.22	.24	.58	
社会35 相手の立場にたって考えてみるができる	2.98	.82	.21	.63	.23	.04	.22	.15	-.03	.57	
社会43 先生や友だちが話しているとき、きちんと聞くことができる	3.11	.77	.21	.61	.01	.24	-.01	.09	.29	.56	
社会33 まちがいがあつたとき、素直にあやまることができる	3.17	.81	.03	.52	.25	.06	.23	.28	.15	.49	
社会36 人や自分が失敗してもゆるすことができる	3.22	.76	.01	.48	.15	.21	.20	.20	.05	.38	
社会30 注意されたとき、自分の行動に問題があつたかどうか考えることができる	3.25	.78	.20	.48	.13	.29	.23	.18	-.11	.47	
自分で勉強をすすめていくスキル(自己学習スキル: =.77)											
学習5 苦手な教科の勉強に時間を多くとって取り組むことができる	2.62	.94	.23	.14	.66	.16	.08	-.01	.09	.55	
学習2 テストの点数が思うように上がらないとき、他の勉強法をためすことができる	2.49	.88	.29	.14	.59	.04	.03	.14	.08	.48	
学習1 テスト前など、自分が実行できるような具体的な目標や計画を立てることができる	2.65	.76	.25	.24	.57	.11	.09	.07	-.08	.48	
学習10 学校やじゅくで与えられたもの以外で、自分でさがして勉強することができる	2.58	.94	.28	.24	.56	.13	-.07	.05	.09	.48	
健康58 食事の後に、はみがきがきちんとできる	3.29	.83	.05	-.04	.54	.14	.16	.22	.17	.42	
健康57 外から帰ってきたとき、手あらいやうがいきちんとできる	3.21	.92	.07	.09	.47	.20	.11	.24	.32	.45	
学習4 自分に合っていると思える方法で勉強をすることができる	3.04	.82	.25	.19	.43	.26	.19	.00	-.04	.40	
課題をきちんとやるスキル(課題遂行スキル: =.77)											
学習7 宿題を家でやることができる	3.60	.76	.01	.11	.10	.79	.15	.14	.07	.68	
学習9 つかれていても宿題などやるべきことはできる	3.34	.83	.02	.17	.18	.75	.07	.21	.05	.68	
学習12 てい出物を決められた日までに出すことができる	3.11	.90	.06	.12	.23	.71	.07	.03	-.02	.58	
進路28 そうじや給食などの自分の決められた仕事をするができる	3.43	.74	.11	.24	.07	.51	.18	.07	.24	.42	
学習8 課題が与えられたとき、だれかにたよる前に一人でまず考えてみるができる	3.08	.83	.33	.10	.10	.47	-.06	.12	.12	.38	
健康のことについて相談するスキル(健康相談スキル: =.75)											
健康50 からだの調子がおかしいとき、ほうっておかないで大人に相談することができる	3.18	.92	.06	.16	.04	.13	.80	.01	.15	.71	
健康51 からだの調子がおかしいとき、その様子を言葉で伝えることができる	3.20	.88	.19	.13	.02	.12	.76	.12	.12	.67	
健康52 からだの変化からくんなやみについて、だれかに相談することができる	2.86	.97	.19	.14	.14	.06	.64	.05	.20	.52	
社会45 自分の考えを家族にはっきりと伝えることができる	3.02	.93	.13	.27	.24	.08	.49	.14	.04	.42	
友だちと会話をするスキル(コミュニケーションスキル: =.70)											
社会39 男子は女子と、女子は男子と自然に話すことができる	3.23	.93	.11	.01	.19	.10	.00	.72	.06	.58	
社会41 きちんとあいさつできる	3.43	.72	.21	.10	.09	.17	.07	.57	.15	.44	
社会40 苦手な友だちともつき合うことができる	2.70	.88	.04	.40	.14	.00	.06	.53	.16	.49	
社会42 人どう話しかけていいのかわかる、どう会話を始めたらいいのかわかる	3.07	.80	.36	.17	.12	.18	.04	.51	.11	.49	
社会38 自分と同じくらいの年の人と話すことができる	3.53	.73	.30	.02	-.09	.22	.15	.47	.02	.39	
自分の体調を気をつけるスキル(健康維持スキル: =.62)											
健康55 つかれを感じたとき、しっかりと休むことができる	2.98	.98	.04	.12	.11	.09	.15	.20	.73	.64	
健康56 生活のリズムをくずさないように、すいみん時間に気をつけることができる	2.61	1.04	.06	.20	.01	.16	.20	.05	.67	.56	
健康54 からだが必要としている栄養をバランスよくとることができる	2.85	.90	.25	.10	.30	.00	.13	.08	.53	.47	
二乗和			4.86	3.30	2.99	2.94	2.57	2.50	1.99		
寄与率(%)			11.30	18.98	25.94	32.79	38.78	44.59	49.23		

注) 項目作成段階で学習面に分類されていた項目 学習, 社会面 社会, 進路面 進路, 健康面 健康

因子に含まれた7項目は、「ぼう力をふるったり人をきずつけることを言う前に、一度止まって考えることができる」「授業中むだ話をしないで、先生の言うことに集中できる」など、学校生活の中で特に集団で活動する上で重要な自分の感情や衝動を統制するために必要なスキルに関連した項目であった。このことから第Ⅲ因子を『集団活動スキル』と命名した($r = .79$)。第Ⅳ因子に含まれた7項目は、「苦手な教科の勉強に時間を多くとって取り組むことができる」など自分で行う学習に関する項目と、「食事の後に、はみがきがきちんとできる」といった自己管理に関する項目であった。このことから第Ⅳ因子を『自己学習スキル』と命名した($r = .77$)。第Ⅴ因子に含まれた5項目は、「宿題を家でやることができる」「てい出物を決められた日までに出すことができる」など、宿題や課題を行うスキルに関する項目であった。このことから第Ⅴ因子を『課題遂行スキル』と命名した($r = .77$)。第Ⅵ因子に含まれた4項目は、「からだの調子がおかしいとき、ほうっておかないで大人に相談することができる」など、体調について大人に相談するスキルであった。このことから第Ⅵ因子を『健康相談スキル』と命名した($r = .75$)。第Ⅶ因子に含まれた5項目は、「男子は女子と、女子は男子と自然に話すことができる」「きちんとあいさつできる」など、同年代の子ども同士のコミュニケーションに関連した項目であった。このことから第Ⅶ因子を『コミュニケーションスキル』と命名した($r = .70$)。第Ⅷ因子に含まれた3項目は、「つかれを感じたとき、しっかりと休むことができる」など、健康面のスキルの中で自分で行う健康維持行動

に関連した項目であった。このことから第Ⅷ因子を『健康維持スキル』と命名した($r = .62$)。

(2) 学校生活スキル尺度(小学生版)の信頼性・妥当性 まず信頼性に関してだが、表2に示されているように、各下位尺度において $r = .62 \sim .85$ となり、健康維持スキル以外の下位尺度はいずれも.70を越えており高い内的一貫性が示された。再テスト信頼性の検討のため、同一の対象者に実施した2回の学校生活スキルの各下位尺度の得点について下位尺度ごとに相関係数を算出したところ、自己学習スキル($r = .80$, $p < .01$)、課題遂行スキル($r = .73$, $p < .01$)、進路決定スキル($r = .74$, $p < .01$)、集団活動スキル($r = .83$, $p < .01$)、健康維持スキル($r = .48$, $p < .01$)、健康相談スキル($r = .69$, $p < .01$)、コミュニケーションスキル($r = .79$, $p < .01$)となり、健康維持スキルが中程度の相関であったことを除いてそれぞれ高い正の相関が示された。ここで高い正の相関が得られたことは、再テスト信頼性が高いことを示す。

次に学校生活スキル尺度(小学生版)の妥当性に関して述べる。まず、前述のように本尺度を因子分析した結果、学校心理学(石隈, 1999)の提唱する援助領域の枠組み(学習面・社会面・進路面・健康面)と概ね対応する因子構造が得られたことは、この尺度の妥当性を支持する結果である。次に、学校生活スキル尺度の各下位尺度と、学校適応尺度の対応する側面との関連を検討するため、ピアソンの相関係数を算出した(表3)。学習関連のスキルからなる『自己学習スキル』『課題遂行スキル』と学習面の適応は中程度の正の相関関係にあることが示された($r = .49 : r = .56$, $p < .01$)。

表3 学校生活スキルと学校適応の相関係数(r)

	学 校 適 応				
	学習面	心理面	社会面	進路面	健康面
学校生活スキル					
自己学習スキル	.49**	.03	.37**	.36**	.15**
課題遂行スキル	.56**	.06	.33**	.29**	.19**
進路決定スキル	.30**	-.08	.35**	.51**	.01
集団活動スキル	.51**	.14**	.33**	.35**	.18**
コミュニケーションスキル	.39**	.04	.49**	.42**	.09
健康相談スキル	.31**	.14**	.39**	.37**	.21**
健康維持スキル	.33**	.23**	.34**	.35**	.31**

* $p < .05$, ** $p < .01$

進路関連のスキルからなる『進路決定スキル』と進路面の適応の相関係数は $r = .51$ ($p < .01$)であった。対人関係関連のスキルからなる『集団活動スキル』『コミュニケーションスキル』と社会面の適応は中程度の正の相関関係にあることが示された ($r = .33 : r = .49$, $p < .01$)。健康関連のスキルからなる『健康相談スキル』『健康維持スキル』と健康面の適応は若干低くはあるが正の相関関係にあった ($r = .21 : r = .31$, $p < .01$)。これらのことから、学校生活スキルの7つの下位尺度はそれぞれ想定していた学校適応の側面と正の相関関係にあることが示され、各下位尺度の構成概念妥当性は支持された。以上のことから、学校生活スキル尺度(小学生版)は「健康維持スキル」の信頼性、「健康維持スキル」と「健康相談スキル」の妥当性に課題が残ったが、その他の下位尺度は高い信頼性・妥当性を有していると言える。

(3) 学年差・性差の検討 まず各下位尺度における学年差を検討するため、両側検定によるt検定を実施した(表4)。その結果、小学校5年生・6年生の間では学校生活スキルの差はみられなかった ($t = -.27 \sim .99$, n.s.)。今回学年間で有意差がみられなかったことは、スキルが学習されるものであり学年が上がるにつれスキルが向上することが期待されることとは一致しない結果である。この結果が生じた理由には、いくつかのことが考えられる。第1に、このような調査で自己のスキルを評価することを求められたとき、自分が所属する集団の基準(norm)との比較により評定することが考えられる。その場合、学年が上がるにつれ個人のスキルが向上していたとしても、自己のスキルに対する評価は比較的一定になることが考えられる。第2に、6年生になりさらに学校生活スキルを活用する場面が増え(例えば、進路決定行動や学校内の

表4 学年差の検討

領域/性別	5 年 生			6 年 生			t値
	n	M	SD	n	M	SD	
学校生活スキル							
自己学習スキル	239	19.72	3.99	254	20.02	3.90	-.83
課題遂行スキル	238	16.61	2.94	257	16.39	2.97	.80
進路決定スキル	231	34.31	6.59	255	34.57	6.26	-.45
集団活動スキル	234	21.11	3.84	256	21.41	3.69	-.90
コミュニケーションスキル	240	16.05	2.72	253	15.85	2.80	.81
健康相談スキル	243	12.23	2.78	255	12.30	2.83	-.27
健康維持スキル	242	8.52	2.18	254	8.32	2.25	.99

* $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表5 性差の検討

領域/性別	男 子			女 子			t値
	n	M	SD	n	M	SD	
学校生活スキル							
自己学習スキル	274	19.20	4.04	219	20.71	3.66	-4.30**
課題遂行スキル	277	16.03	3.17	218	17.08	2.54	-3.99**
進路決定スキル	271	33.89	6.42	215	35.15	6.35	-2.16*
集団活動スキル	272	20.46	3.80	218	22.28	3.45	-5.47**
コミュニケーションスキル	273	15.45	2.80	220	16.57	2.58	-4.58**
健康相談スキル	280	12.08	2.88	218	12.50	2.69	-1.69+
健康維持スキル	279	8.35	2.25	217	8.51	2.17	-.82

* $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

リーダーとしての行動),実際にスキルを実行した結果自分ができていないことをより意識した結果,学年が上がるにつれスキルの自己評価が厳しくなる可能性もある。スキルとしては高まっても,自己評価が厳しくなることで相殺されることも考えられる。第3に,5年生・6年生は学校内の高学年ということで同じような役割や行動をとることが求められるため,5年生・6年生間では日常活用しているスキルに大きな違いがみられないのかもしれない。今回有意差が得られなかった意味について検討するためには,自己評定法の利用だけでは限界があるため,教師や親の評定尺度法の実施や,研究者による行動評定の実施などを用いて,スキルの発達的变化を検討していく必要がある。

次に各下位尺度における性差を検討するため,同じく両側検定によるt検定を実施した(表5)。その結果,健康維持スキルと健康相談スキルを除く全ての学校生活スキルの下位尺度で,女子が男子より有意に得点が高かった($t = -2.16 \sim -5.47, p < .05$)。これに関連して,社会的スキルの研究において,女子の方が男子よりも社会的スキルが高いという結果が一貫して得られている(菊池,1988;庄司,1991)。集団活動スキルとコミュニケーションスキルにおいて女子の方が得点が高いという今回の結果は,それと一致する結果であった。また,飯田・石隈(2002)の中学生の学校生活スキルの研究において,女子の方が男子より自己学習スキルの得点が高いことが示されているが,今回の結果は小学校高学年の段階でも女子の方が自己学習スキルが高いことを示している。

総合的考察

1. 本研究のまとめ

本研究の第1段階では,飯田・石隈(2002)の学校生活スキル尺度(中学生版),小学生を対象とした自由記述調査,小学校教師を対象とした自由記述調査より,小学生の学校生活スキルの個人差を測定する項目を収集・作成した。第2段階では,小学校5・6年生505名を対象に実施した調査を基に因子分析を行った結果,「自己学習スキル」「課題遂行スキル」「進路決定スキル」「集団活動スキル」「コミュニケーションスキル」「健康相談スキル」「健康維持スキル」という7領域,43項目からなる学校生活スキル尺度(小学生版)

が開発された。また,各下位尺度の信頼性・妥当性を検討した結果,健康相談スキルと健康維持スキルにおいて信頼性・妥当性の課題が残ったが,その他の下位尺度については高い信頼性・妥当性が示された。

2. 心理教育的援助サービスへの提言

本研究で得られた知見を基に,小学校で行う心理教育的援助サービスの計画・実践に関して2つの提言を述べる。第1に,小学生の学校生活スキルを測定する尺度が作成されたことで,様々な目的に用いることが可能となった。飯田・石隈(2002)は学校生活スキル尺度の利用について,援助者側の利用と生徒側の利用それぞれについて述べている。援助者側の利用方法としては,1年間の始めや学期の始めに各生徒の今後の援助について考える段階で,生徒の援助ニーズを把握するために実施することが考えられるとしている。また,スキルトレーニングを実践する際に,生徒の自己のスキルに対する評価の変容を検討するための道具としても活用できることを述べている。また,本研究でも飯田・石隈(2002)が指摘しているように,生徒の自由記述の回答において「自分のことが前よりよくわかった」「これから何を気をつけなくちゃいけないかがわかった」といった自己洞察の深まりを示す感想が多く得られた。このことから,この尺度は生徒が自分の行動を見直すためのチェックリストとしても利用できると思われる。この尺度を生徒に実施する際には,「勉強を自分ですすめていくスキル」「課題に取り組むスキル」「将来について考えるスキル」「集団で生活するスキル」「友だちとかがかわるスキル」「健康に気をつけるスキル」「健康について相談するスキル」など,小学生が各領域における自分の行動を振り返りやすくする見出しをつけることが有効であると考えられる。

第2に,小学生の学校生活スキルの構造の特徴から,スキルに焦点を当てた援助サービスのあり方についての示唆が得られた。小学校で得られた7因子は,学習面と健康面と1つにまとまると予測されていた項目が,学習面では「自己学習スキル」と「課題遂行スキル」,健康面では「健康維持スキル」と「健康相談スキル」に分かれたことによるものである。小学生では,学校生活を送る上で必要とされるスキルが,大人のサポートを上手に受けながら学校生活を送っていく側面と,自分のスキルを発揮して学校生活を送っていく側面が

あるのではないと思われる。具体的には、学習面では、大人から出される宿題や課題をこなすことによって自分の勉強を進めていくスキルと、自分でわからないことを調べたり勉強方法を工夫するという2つの側面がある。健康面では、自分で自分の体調に気をつけるスキルと、体調が悪くなったときに大人に相談するスキルという2つの側面がある。小学生の学校生活のサポートでは、この2つの側面を意識しながら、大人側からの働きかけを得ながら実行するスキルから、だんだんと自分で実行するスキルへ移行することを支援する必要があると思われる。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題を3点述べる。第1に、尺度開発のための手続きにおいて、再テスト信頼性の検討で対象が5年生のみで行われていることや、妥当性を検討するために用いた尺度「学校適応尺度」が小学生の学校適応を測れているかどうかの検討が不十分であったという問題点がある。第2に、開発された学校生活スキル尺度（小学生版）の信頼性・妥当性について、ほとんどの下位尺度では高い信頼性・妥当性がみられた一方で、健康維持スキルの信頼性係数が.60という低い値であったことと、健康維持スキル・健康相談スキルと学校適応の健康面の適応との相関が低く妥当性が十分に示されなかったことがある。健康維持スキルおよび健康相談スキルの信頼性・妥当性については、項目数を増やすことおよび妥当性を検討するために用いる他の尺度を別のものを用いることを検討した上で、同様の分析を行う必要がある。第3に、今回得られたスキルの構造は、学校心理学の学習面、心理・社会面、進路面、健康面と対応すると同時に、中学生のスキルの構造よりスキルが分化されているという点で異なっていた。小学生から中学生にどのようにスキルが発達していくのか、各学校段階でどのようなスキルが特に重要となるのか、発達の観点からの検討が必要である。これらは今後の課題としたい。

引用文献

- Darden, C.A., Ginter, E.J. & Gazda, G.M. 1996 Life-Skills Development Scale-Adolescent Form: the theoretical and therapeutic relevance of life-
- skills. *Journal of Mental Health Counseling*, 18, 142-163.
- ハヴィガーストR.J. 児玉憲典・飯塚裕子訳 1997 ハヴィガーストの発達課題と教育 - 生涯発達と人間形成 川島書店
(Havighurst, R.J. 1972 *Developmental Tasks and Education*. 3rd ed. New York: David McKay.)
- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルに関する研究 - 学校生活スキル尺度（中学生版）の作成から *教育心理学研究*, 50, 225-236.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 - 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 菊池章夫 1998 また思いやりを科学する - 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Merrell, K.W. & Gimpel, G.A. 1997 Social skills of children and adolescents: Conceptualization, assessment, treatment. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 2002 中学生の被援助志向性に関する研究 日本学校心理学研究会第4回大会大会発表
- 庄司一子 1991 社会的スキルの尺度の検討 - 信頼性・妥当性について *教育相談研究*, 29, 18-25.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係 *健康心理学研究*, 10, 23-32.
- 戸ヶ崎泰子・嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 1995 社会的スキルの変化が友人関係と学校不適応に及ぼす影響 日本行動療法学会第21回大会発表論文集, 180-181.
- WHO 川畑徹朗監訳 1994 ライフスキル教育 大衆館
(World Health Organization: Division of Mental Health 1993 *Life Skills Education In Schools*. Michigan: University Microfilms International A Bell & Howell Information)

School-Life Skills Scale: Development of an
Elementary School Student Form

Toyokazu YAMAGUCHI, Junko IIDA
& Toshinori ISHIKUMA

The purpose of the present study was to develop a scale to measure individual differences in school-life skills in elementary school students. School-life skills were defined as ones needed to solve the developmental and educational tasks faced by students during their elementary-school years. In study 1, skill items were collected from 3 sources: the school-life skills scale: Junior high school student form (Iida & Ishikuma, 2002), skill descriptions provided by elementary school students, and ones provided by elementary school teachers. In study 2,

a questionnaire of the 59 chosen items was completed by 505 elementary school students. As a result, a 43-item School-Life Skills Scale-Elementary School Student Form was developed. Factor analysis yielded 7 subscales: self-study skills, task completion skills, career decision skills, group activity skills, health maintenance skills, help-seeking skills concerning one's health, and peer communication skills. The results also showed that the scale was highly reliable and valid for measuring school-life skills in elementary school students.

Key words: school-life skills, elementary school students, scale development

(2004年10月23日受稿; 2005年8月10日受理)